

ロレンスの『きつね』論考

——きつねの象徴の二面性について——

山 田 晶 子

序

これまで書かれてきた『きつね』論は、主流をなすものとしてはリーヴィスのものとモイナハンのものがある。どちらの論者も、マーチを救う者としてヘンリーの存在を全く肯定している。彼らはこの中編小説のテーマはマーチとヘンリーの結婚であり、マーチがバンフォードとの生きながらの死 (“death in life”) の生活から、ヘンリーによって生命ある人生へ助け出されるものであると捉えている。しかし、ヘンリーとマーチの結婚生活は幸福なものではない。

「何かが失われていた。彼女の魂は新生活で揺られる代りに、あたかも傷つけられたかのようにうなだれ血を流すように思われた。彼女は海辺で遠くを眺めながら、手を 彼の手にゆだねて長い間 すわっていたものだった。^①」

マーチの不幸を論ずることなく、ヘンリーによるバンフォードの殺害までを読んで、この小説が「生（ヘンリー）の死（バンフォード）に対する勝利」^②であると解釈するのは納得できない。リーヴィスはこの小説を「そ

三四八

① D. H. Lawrence, "The Fox" in *The Short Novels* vol. 1 (Heinemann: London, 1956), p. 65.

② Julian Moynahan, *The Deed of Life: The Novels and Tales of D. H. Lawrence* (Princeton, New Jersey, Princeton University Press, 1963), p. 199.

の強さは、テーマが提示される完全さ、深さ、あいまいさのない明白さの中に存在する。そしてそれは重要な物語のうちで最高のものの一つである^③と賞讃し、そのテーマを男女の愛と結婚の物語であると捉え、ヘンリーのマーチに対する気持は真面目なもので、物語には皮肉な点は全くないと述べている。

しかし性本能、生命力の象徴であるきつねは、本来的な性質からばかりでなく、小説の中においても読者にずるさを感じさせる存在であり、マーチにとってきつねと同一視されるヘンリーは、同じようにずるさを備えている。本論ではきつねの象徴の二面性に注目して、この作品がリーヴィスが論ずるような真しに互いを求め合う男女の愛の物語として簡単には割り切れないこと、また作品の結末にはアイロニーがあることを述べたい。

(1) バンフォードとマーチの生活

バンフォードとマーチという姓名で知られる^④三十歳近い二人の未婚の女性が、第一次世界大戦末期に、人付き合いもせず孤独に農業を営んでいる。二人の住んでいる農家は、森から野原一つ分の距離だけ隔たった所にあり、村から遠く離れて孤立している。二人の女性の特徴は対照的で、バンフォードは体が弱く目が悪く、小柄でやせている。一方マーチは半ズボンに上着、長ぐつという出で立ちで、体格が逞しく男の役割をしている。彼女がヘンリーに求婚されて、ある晩ドレスを着るようになる段階までは、彼女が男のようであることがしばしば述べられるが、これは二人の生

③ F.R. Leavis, *D.H. Lawrence: Novelist* (Chatto & Windus, London, 1955), p. 256.

④ E. Goodheart はその著 *The Utopian Vision of D.H. Lawrence* で「互いを姓名で呼ぶのが1920年代の解放された女性の習慣であった」と述べているが、マーチとバンフォードがどのくらいこのことを意識していたかは明らかではない。

活が擬似結婚生活であり、半同性愛であることを示している。

しかし二人の女性のうちで真に女らしいのはマーチなのである。彼女は一見して男っぽい、縮れてふさふさした髪や大きな黒い目は飽くまで女らしい。だがその目は時々皮肉なきらめきを浮かべ、自分達の暮しへの不満を無意識に表わしている。

と言うのも二人の農場経営は不幸なことにうまくいかない。二匹飼っている雌牛のうち一匹は牧場のさくの外へ逃げ出してしまうし、もう一匹は子をはらんだが、二人は出産させる仕事に不安でそれを売ってしまう。このことには、二人の、生殖に対するとまどいが見られる。また鶏、家鴨などの家きんもどういうわけか卵を産もうとしない。二人は、人生はただあくせく働くためにあるのではないと思い、趣味としてサイクリング、読書、工芸などをしようとするが、家きんの世話のために時間がとれない。二人が仕事だけに専念できず、自分達を完全に満足させてくれる何かを求めていることがわかるが、趣味はその真の目的ではないことが、二人がそれに集中できないことによりわかる。その上何よりも害悪となったのはきつねの出現で、鶏はどんどん盗まれる。

かくして二人の財産はだんだん減っていき、二人は互いにいらいらするようになる。二人の生活が思うように進まない原因はどこにあるのだろうか。モイナハンの言によれば、「マーチとバンフォードは結婚生活を模倣しているように、農業経営を下手に模倣している」のである。^⑤

(2) マーチときつねの関係

「きつねは本当に彼女らを怒らせた。」^⑥ きつねは二人の女性が意識せず抑圧している性本能を象徴している。二人のいら立ち、生活の不首尾は、男

⑤ *The Deed of Life*, p. 197.

⑥ *The Fox*, p. 5.

を排除した不自然な生き方に原因がある。

二人はきつねを仕止めようと交替で銃を構えて見張りに立つ。この頃からマーチの心には分裂が起こり、意識と無意識の錯綜した半ば夢見るような状態が始まる。彼女は物を見ていても本当には見ていず、音が聞こえていても本当には聞いていず、どこか放心状態なのである。この意識の分裂は、マーチが現在の生活に不満であるため漠然と未知のものへ憧れていることを示している。

ある夕方、マーチはきつねを仕止めるために銃を持って森の近くまで来る。彼女の心はいつものようにぼんやりとしている。その時たまたま視線を下に向けるときつねがいた。マーチはきつねに気がついたが、どういうわけか一種の呪縛をかけられて身動きできず、きつねに魅入られてしまう。きつねは逃げもせずに彼女を凝視し、その目付きは彼女の本心を見抜いていると言わんばかりに鋭く威圧的である。ようやく彼女が我に返ってきつねを撃とうとした時、きつねは風のように静かに逃げってしまう。半ば無意識状態のマーチがきつねにだけ気がついたことは、彼女の無意識を占めているものがきつねであることを読者に知らせる。

マーチはこの出来事をすぐにはバンフォードに話さず、2、3日立ってから話すのだが、このことは（多分無意識にはあるが）、マーチが今後バンフォードから離反していくことを暗示している。きつねはマーチをバンフォードから引き離す役割をしている。

その後マーチは意識せずきつねに支配され、どうしても見つけ出そうと決意し、しょっちゅう森の近くまで来てきつねを求めるようになる。だが彼女がきつねを求めるのはそれを殺すためではない。彼女の自己探究が始まったのである。

マーチのきつねへの関心は、自らの抑圧された性本能の目覚めを意味する。きつねは、マーチを半ば誘い半ば軽蔑しているように思われその上ずるい。きつねを求めている時の彼女の目はいきいきとし、頬はかすかに紅

潮するが、以前のバンフォードとの陰うつで不毛な生活からマーチが離れて生命力を増し始めたことがわかる。後にヘンリーの求愛を受ける頃から、彼女の頬はバラ色とかピンク色に染まって女らしくなっていく。

マーチがきつねを求めて外出すると、バンフォードがいつも家の中から彼女を呼び戻す。ロレンスの作品では、森は野生と自然を意味し、文化的・人工的な家の生活と対比されている。森を住家とするきつねは、マーチを、女だけの不毛で不自然な生活から、本来の自然な人間へ立ち帰らせようとしているのであり、生命力の象徴である。

きつねはなかなかつかまらない。草むらの蛇のように見つけるのが難しく、マーチはきつねが足下に来る前には、草の中にその赤い影と尾の白い先を見ただけであるし、マーチと対面した時は風のように逃げる。このようなきつねのつかまえにくさは、本能や無意識がつかみにくいことを象徴している。

(3) ヘンリーの登場

A. ヘンリーの二面性

だんだん冬が近づいてきて、朝がすっきりと明けず、昼も夜も暗くて陰気な季節が来る。長い夕方には家の内外が抑圧された陰うつな雰囲気になり、バンフォードとマーチの生活の救いようのなさを暗示している。二人は夜になると不安になるが、二人の不安の質には相違がある。バンフォードの不安は、浮浪者が侵入してくるのではないかという外的なものであり、マーチの不安は欲求不満のための憂うつさである。

このような夕方、一人の若者が二人の家を訪れる。彼の名前はヘンリー・グレンフェルであり、二人の女性が農場へ住み着く二年前、祖父と一緒にこの家に住んでいた。しかし祖父と折り合いが悪く、カナダへ逃げて軍

隊へ入り、イギリスへ派遣されて軍隊生活をしているのだが、休暇で戻って来たのである。彼の年齢は二十歳そこそこである。ここで注意すべきことは、彼の外観の描写がきつねと酷似していることである。彼の顔色はきつねの毛色のように赤っぽく（血色が良い）、髪は長めの白っぽい金髪で、目は異常な程鋭くて、雰囲気全体がきらきら光っている。そして顔を前へ突き出す癖は、きつねが獲物の匂いをかぐ様子を思わせる。きつねが夜、鶏を盗みに来るように、彼も夜に二人の家へやってくる。^⑧

彼は外見だけではなく本質的にきつねに似ていることが、狩人の精神を備えた男であることによりわかる。後に彼が二人の家に住み着くようになってから、彼はいつも銃を持って森の辺をうろつき、うさぎや小鳥を撃つ。そして彼はマーチをバンフォードとの同性愛的生活から別れさせ、異性の世界へ引っ張ってゆこうとする。きつねの役割はヘンリーに手渡されるのである。

ヘンリーの声は大変柔らかいという特徴がある。その声を聞くとマーチはきつねに呪文をかけられたように、彼に呪文をかけられてしまう。彼女は無意識のうちにヘンリーときつねを同一視し、彼を見つめる瞳はきつねを探していた時のように開いて輝く。彼女は自分では気づいていなかったのだが、異性を求めているのだ。今やきつねがヘンリーとなって彼女の眼前に姿を現わしているので、彼女は意識の分裂を感じることもなく、気持ちが落ち着いて楽になる。きつねを探し求めている時、マーチはその匂いをかぐことができるまでになっていたのだが、その匂いはヘンリーの体が発する野性の動物のような匂いと一体になっている。匂いは最も本能的な感

⑦ モイナハンが登場人物の目の特徴が三人の性格と関係があることを指摘している。

⑧ M. Engel は、ヘンリーが袋を持って入って来る時の様子は、物語の Reynard を示していると指摘している。M. Engel, "The Continuity of Lawrence's Short Novels" in *Twentieth Century Views: D.H. Lawrence* ed. by Mark Spilka (Prentice-Hall, Inc., 1963), p. 94.

覚であり、マーチの意識の世界と無意識の世界を微妙に結合している。

一方、彼も彼女に気を引かれ、きつねのように鋭い目でたえずマーチを見る。だが彼女は彼に自分の姿を見られることを辛がっているようで、見られまい、見られまいとして影の中へ引っ込む。彼に姿を見られまいとするマーチの様子は、暗い洞穴に隠れている獲物のようであり、彼女に目を付けているヘンリーは、獲物を狙う狩人である。彼女が彼に姿を見られまいとするのは、未知なる性への恐れ、しゅうち心と、狩人のような男性に捕われまいとする女性の本能的な自己防衛心のためである。このようにマーチの心は両面的で、ヘンリーに対して憧れと恐れを持っている。

バンフォードはと言えば、ヘンリーを弟のように思って世話をし、男性への態度にマーチとの違いがある。バンフォードは彼に母性愛を感じているのである。二人は彼に自分達の農場経営の失敗を語り、自分達が自然について低い見方しかしていないと言う。特にバンフォードは「自然についての話は止して」と言い、異性を拒否する彼女の性質の不自然さを暴露している。

ヘンリーの二人に対する態度は丁重である。しかし彼が紳士のようなかと言うとそうではなくて、食事の仕方が動物的でがつつしている。後にも彼の粗野さ、下品さが食事の仕方に表われている。たとえば口一杯頬ばったまましゃべるとか、動物のように「皿にあごを近づけて」食べるとか、音を立ててお茶をすすりバンフォードの気分を悪くするとかである。ヘンリーは生命力ある若者という正の意味を持つ一方、きつねのようなこうかつさ、ずるさ、下品さという負の面を備え、その存在のあり方が二面的である。

彼はその晩、二人に勧められて農場に泊ることになる。その晩マーチはきつねの夢を見るが、その夢は彼女の将来を暗示している。きつねの歌声はヘンリーの柔らかな声であり、きつねの尾との接吻は、彼女がヘンリーと性的関係を持つことを暗示している。

彼は村に宿を見つけることができず、バンフォードに農場に滞在することを勧められて、二週間滞在することになる。そのように勧められた時の彼の様子は表面は丁重であるが、いかにも裏がありそうである。彼の目は曇っているのである。

「突然彼は曇った青い目を上げて、考えることなくまっすぐにマーチの目をのぞき込んだ。彼は彼女と同じようにはっとした。彼もまた少しひるんだ。マーチは彼が頭をそらした時、きつねの暗い目から来たように、彼の目から同じずるくあざけるマーチを見透しているひらめきが飛び出し、彼女の魂の中へ入り込むのを感じた。彼女は苦しんでいるかのように、また眠っているかのように口をきっちり結んだ。」^⑨

ヘンリーは二人の女性には気が付かれず、内心ほくそ笑んでいる。作者はヘンリーのずるさを、彼が目に見えぬ微笑を浮かべていたと表現し、その微笑は「ずるい小さい炎」^⑩のようであるとして、彼のきつねの性質を述べている。彼は泊り続けてもよいと言われて嬉しさに手を擦り合せんばかりである。マーチはそのようなヘンリーに見つめられると、口が傷つけられたように傷む。夢の中できつねの尾に口を焼かれたことと関連がある。一方、バンフォードは少し困惑し不安になる。ヘンリーが二人の女性の生活に入ったことは、何か事件が起こる印象を与える。

2, 3日立ってから、彼にはマーチと結婚したらどうかという考えが浮かぶ。彼女の方が十歳近く年上だが、自分の方が彼女の支配者だと思う。この後に彼の狩人としての性格と、マーチを獲物として手に入れる気持が述べられているが、ヘンリーは彼女を野うさぎのように疑い深いと思い、その後もマーチはたびたびうさぎにたとえられる。彼は死んだうさぎを手にして自分の思い付きを計算しているようだが、ここで彼女が彼に捕えられることの暗示がされている。他の個所では、ヘンリーはうさぎと野鳥を

⑨ *The Fox*, p. 18.

⑩ *Ibid.*, p. 18.

狩してくることが時々述べられているが、マーチがうさぎにたとえられているように、バンフォードは時々鳥にたとえられているので、二人の女性がヘンリーの獲物になることの暗示がある。このような狩人としての男性と獲物としての女性の関係は、きつねと獲物の関係であるが、作者がこの関係を批判していることが後にわかってくる。

彼がマーチに結婚の話を持ち出した瞬間から彼女には恐怖心が生じるが、一方では猫の手足の裏のような彼の柔らかい声の感触に解放感を味わう。彼女の承諾を得ようと懸命な彼の態度には作為が感じられる。

「それから彼は、声の中に不思議な全ての柔らかさを吹き込みながらしゃべった。^⑪」

「『わかってしゃべっているんですよ』と、彼はあたかも彼女の血の中に彼の声を生じさせるかのように柔らかく粘った。^⑫」

マーチはヘンリーの前にいる時、彼の及ぼす支配力のために無意志となる。彼は彼女の緊張感を失わせるが、それは人生の重荷からの解放である一方、苦痛に満ちた「死」であり、彼女は彼に言い寄られると、死ぬような殺されるような思いをする。最後のマーチとヘンリーの結婚生活においても、彼女には休息と同時に不本意な生き方であるという意識があり、幸福になれない。

B. 三角関係

マーチが承諾の返事をしないうちに、バンフォードが家の中から二人を呼ぶ。二人の親密な様子を感じ取ったバンフォードには、ヘンリーが存在がうさん臭く思われるようになる。彼は野性的で戸外に属する人間であり、洗練された生活を望む屋内に属する人間のバンフォードとは相容れな

⑪ *Ibid.*, p. 22.

⑫ *Ibid.*, p. 22.

い。この点、彼女は『息子たちと恋人たち』のモレル夫人に似ている。彼女も、夫のウォルターが汗まみれで整頓された家の中へ入って来ると、彼に家が汚されるのを嫌う。^⑬パンフォードは“thinness”が強調されているが、これは彼女の生命力の弱さ、存在の薄さを示している。彼女はヘンリーの存在の、燃えるような重さに耐えられない。

「彼女は、彼の澄んだ用心深い目に出会いたくなかった。彼女は彼の顔の不思議な輝き、繊細な細かい毛の生えた頬、血色の良い皮膚を見たくなかった。その皮膚は全く冴えない色をしていたが、生命の不思議な熱で燃えているように思われた。彼を見ると彼女は少し気分が悪くなった。彼の肉体の存在の特質は余りに突き通すようで余りに熱すぎた。」^⑭

ヘンリーやきつねが生命力を象徴する赤さでたびたび形容されるのに反して、パンフォードは灰色、茶色などの死人を思わせる色で形容されている。彼女はヘンリーから発散される本能の象徴としての匂いを嫌う。彼は彼女の胸は鉄のようだと思うが、これは彼女が人間であることを否定し、同時にその憎むべき固い意志を象徴している。彼女は自分の生き方考え方が正しいという確信を持っている意志の女性であり、『恋する女たち』に登場するハーマイオニと似ているが、これらの女性らしい官能性を欠いた人間は、ヘンリーと同様に作者によって批判されている。ロレンスは「女たちは大変うぬぼれている」というエッセイで、自分の生き方に確信を持ち過ぎて、それを人にまで押し付ける女性を批判している。パンフォードは男性を拒絶した女性で、男性を受け入れることは女性の威厳を減ずることと卑しめることと思っている。マーチがパンフォードの死んだ夢を見た

⑬ D. H. Lawrence, *Sons and Lovers* (New York: The Viking Press, 1913), p. 34.

⑭ *The Fox*, p. 25.

⑮ 拙論「『恋する女たち』論考」（信州大学教育学部紀要第39号）参照。

時、彼女の体を包むものとしてきつねの毛皮しか見つけられず、それがバンフォードに相応しくないとと思うのは、バンフォードが自然と相容れないことを読者に知らせている。彼女は「家」にたとえられ慣習の世界に属し、マーチがヘンリーによって野性（自然）の世界へ引っ張られるのを何とか阻もうとする。

マーチという女性は、『恋する女たち』に登場するアーシュラ、グドルーン、ハーマイオニらと違って意志を持たない女性であり、そのあいまいな態度はいらいらする程である。ヘンリーに結婚の承諾をした時は、バンフォードが呼んでいるから急いでいたために「どちらでもあなたのいいようにして」と言ってしまうのである。翌朝、ヘンリーがバンフォードに「僕たちは結婚します」と打ち明けた時も、ヘンリーとバンフォードがその是非について言い争うばかりで、マーチは他人事のように平然としている。彼女は二人の争いを楽しんでいる様子で、その態度は中世の、二人の騎士に言い寄られて、戦って勝った方に身を任すという貴婦人と似ている。自らの賞品性を認めている女性像である。そしてヘンリーはマーチを自分の「報酬」だと思っている。

彼女がバンフォードとの生活に不満足であることは、作者が彼女の無意識について説明をしていることによりわかるが、マーチ自身の意識にまで上っていない。彼女がバンフォードの死んだ夢を見ることは、無意識のうちに彼女がヘンリーの側についていることを読者に知らせる。そしてヘンリーが現われてから、服装や役割が男のようであったマーチはどんどん女らしくなっていく。ヘンリーが軍隊へ戻る前夜、彼女は初めてドレスを着て彼を仰天させる。彼女は女らしさのクライマックスに至ったのである。彼女はようやく女らしいと形容される。

その晩ヘンリーは、マーチを外へ連れ出し、彼女の手を自分の左胸に押

⑬ *The Fox*, p. 43.

し当てて、自分もバンフォードと同じく脈打つ心臓を持っていることをマーチに教える。彼女はこの時初めてヘンリーという男の存在を実感するのであり、彼女にはまだ未知の、異性の世界があることを知る。

「彼女の注意を引いたのは、彼女が驚いたためであった。それから彼女は、深く重い力強い彼の心臓の鼓動が、彼方からやってくる何ものかのように恐ろしいと感じた。それは彼方から来る何ものか、彼女に合図をしている外側からやって来る恐ろしい何物かに似ていた。そしてその合図は彼女を麻ひさせた。彼女はジルのことを忘れた。彼女はもはやジルのことを考えることができなかった。彼女は彼女のことを考えることができなかった。その恐ろしい外からの合図^⑭」

マーチは寝る時になって、バンフォードと一緒に寝室へ行かずに彼といたい、もうすでに二人が結婚していたらいいのと思うのだが、ここに至ってようやくマーチはヘンリーを意識して求めている。翌朝ヘンリーが汽車に乗ってキャンプへ去る時、マーチには人生の真実が彼と共に去ってしまっただけに思われる。

しかし婚約届けを出しておいたのにもかかわらず、マーチはバンフォードと二人だけになるとまたもや彼女の影響を受け、男女の恋愛、結婚などをばからしく思って婚約破棄を願い出る手紙をヘンリーに出す。手紙の中で彼女は、自分が彼を真には愛していないこと、バンフォードとの共同生活の方が理性的な生き方であると思うことを述べている。

農場ではマーチが、今にも倒れそうだが倒れない木を切ろうとしていた。24時間の休暇をもらったヘンリーが現れると、マーチはまたすぐに彼の呪文にかけられて無力になってしまう。彼はマーチに代って木を倒すことになり、彼の意志は木をバンフォードの上に倒して彼女を殺害する。バンフォードを殺すことを決心した時のヘンリーは、飛んでいる小鳥を眺

⑭ Ibid., p. 50.

めている猟師のように狙いを定め、木を倒した時は結果がどうなったかを知ろうと、撃ち落した野性の鳥を見るように目を輝かせる。彼にとって獲物であったのは マーチだけではなく、バンフォードもまた そうであった。バンフォードが死んだ時マーチは、子供が泣きたくもないのに泣く時の様子で泣き始めるが、ここにも彼女の微妙な心理がうかがわれる。マーチの優柔不断さを分析すれば、マーチは本能として男性を求めているが、それが理性によって押えられていると言える。一方ヘンリーはようやくマーチを勝ち得て、勝ったという勝利感が何度も押し寄せる。彼はマーチに対しては、これまでそうであったように支配者として対するが、このことは彼が彼女を「見下ろす」という度重なる表現で強調されている。

(4) マーチの不幸

マーチとヘンリーは結婚したが、彼女は幸福ではないし、そのために彼も幸福ではない。彼女はバンフォードが死んでしまったために止むなくヘンリーと結婚したのである。マーチがバンフォードとの「死」の生活から「生」の生活へ移ったとは簡単に断言できず、彼女がヘンリーから与えられた生活も「死」のようであり、ここにアイロニーがある。

「そして彼女は、眠りたいけれど眠ることが死であるかのように、それと戦う子供のように、大変疲れた。彼女は目覚め続けるがんこな努力と緊張をして、目をより大きく開こうとしているように思われた。」¹⁹

このような結末になることは、物語の途中から暗示されている。なぜなら前にも述べたように、ヘンリーはきつねのずるさを備えているし、態度が粗野である。そして未熟さが強調されている。彼を指すためには“youth”とか“boy”が用いられ“man”が使われることはほとんど

¹⁹ *Ibid.*, p. 68.

ない。彼をたとえるのには猫とか子犬のような頼りない動物が使われる。彼の目は猫のように鋭いが“childish”である。顔付きも横に広くて猫のようだし、彼の柔らかな声は猫の手足の裏のような感触である。また子犬のような笑顔を浮べる。その他、未熟な若者を意味する“cub”とも表わされ、彼の声は“yelp”であり笑い声は“yap”であり、彼の鼻は“snout”と表わされている。彼はバンフォードに自分の意志を妨害されると自分の思い通りにならないのですねてしまう子供のようなのである。そんな彼を見る時のマーチは全く彼から心が隔っていて、子供を見つめているようである。マーチはヘンリーに対する自分の気持がわからず常に“I don't know.”と言うが、初めてヘンリーに求婚された時は「私はあなたの母親になる程の年よ」と答える。このように未熟さが強調されていて、ヘンリーはマーチに対して主人であるためには不十分な男性であるという印象を読者に与えるのである。ロレンスは『アーロンのつえ』で、指導者としての偉大な男性がいて、他の男性そして女性はその男性に服従しなければならないと説いているが、ヘンリーには指導者性が欠けている。そのためマーチは、『翼ある蛇』のケイトが積極的にシプリアーノに服従するようにはヘンリーに従えないのであろうし、彼を本当には愛していないと感ずるのである。ヘンリーは、マーチに真実を見せないかのように彼女の精神にベールをかけたがるし、彼女にとって存在理由と思われるものを取り去ってしまいたがっている。あたかも彼女は彼の奴隷であるかのようだ。ロレンスは、「我々は互いを必要とする」というエッセイで、ヘンリーのような“conquering hero”は時代遅れでばかっていると述べ、男女は相並んで流れる二つの川で、それぞれの川はその境界を壊すことなくそれ独自の方向に流れなければいけないと述べている。

マーチ自身にも自分の生き方への責任がある。彼女は意志をある程度持

¹⁹ *Phoenix*, p. 192.

²⁰ *Ibid.*, p. 194.

つべきであり、そうすればバンフォードを死なせなくてすんだであろう。この作品では、バンフォードのように意志を持ちすぎる女性と同様に、余りにも意志のない女性も批判されていると思われる。『きつね』においては三人共が批判されているのである。

以上述べてきたように、きつねには生命力、自然さという正の面と、ずるさという負の面があり、きつねに象徴されるヘンリーも、同じように生命力と男性としての未熟さの両面を合せ持っている。ゆえにヘンリーの存在を一方向的に肯定することは正しくないと思われる。

付記：本論投稿後に読んだ Ian Gregor のきつね論 ('The Fox: A Caveat' in *Essays in Criticism*, vol. IX, January, 1959) には、本論では言及しなかった。

